だの帶、いつかまた逢んとかたる風呂の口、佐夜中山集（片句）さぞ出替を待し六尺、風呂のうらせばきを何と云たの帶、一代男草子（七）遊所のことをいひて、ふんどしのかきかへもなき人ゆく所にあらずとあるも湯具の事と見ゆ、（略）○（中）さきつ年上州草津の温泉に浴しに、まづ旅舍につく時、やどり居る間用ふべき調度借もし買もする其内に、定りて人毎にひさく一柄、下帶。一筋は必買て浴するに用ふ、今は世人丸裸にて湯に入るならひ故、その所の者も客人も、是は温泉なればかくする故あるべしとて、男女ともに湯具して入れ共、これ温泉に限りたる事にはあらず、

〔玉藻〕承元三年五月廿五日丁巳、今日、御湯殿始也、（略）○（中）次小兒下湯、（略）○（中）次御浴殿人、（坊門殿、余乳母也、中納言實綱女）著東床子取膝覆（生絹二重三幅、長五尺、如袴指腰指）結付腰於自袴前野（兼綻之内方付袖）出二足遣右左袴於床子南北以膝覆引掩之踏含槽内小板、（略）○（下）

〔書言字考節用集（六服食）〕風呂敷（フロシキ）

〔倭訓栞（中編二十二）〕ふろしき　俗に包袱の類をいふは、浴後に敷て、坐とする物の名より轉せるなるべし、若狹にてはひろしきといへば、ふろしきは廣敷の轉せるにや、

〔禮容筆粹（五）〕產屋道具之事

一湯。あげ。是もさらし布の宜敷を用べし、尤幾つも有べし、則是風呂敷也、小兒の身をぬぐふべし、

〔本朝世事談綺（二器用）〕風呂敷

元は風呂の揚所に敷て、ゆかたにひとしきもの也、今物を包ふろ敷は、此名をかりたる物也、

〔貞丈雜記（八調度）〕ふろしきとは、風呂に入る時、湯殿に敷きて湯よりあがりたる時、足をのごふ物也、物を包むに布を縫ひつゞけたる形、かの風呂の敷物に似たる故、風呂敷といひならはしたる也、近世の詞なり、

〔棠大門屋敷（一）〕寶の山萬里の下り坂